

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子町田駅前保育園
施設所在地	東京都町田市原町田6-17-8クオーレ1階
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

運動遊び

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

昨今、危険を理由にマットや遊具などの禁止が増えたり、怪我を理由に保育士が遊びを制限することが増えてきてしまった。遊び方、転び方、受け身の取り方がわからないままでは大きなケガに繋がると考え、クッション性の高いマットなど怪我に繋がりにくい環境で体の使い方を伝えていきたいと考えた。

## 2. 活動スケジュール

### 【ハイハイできる環境を作り、たくさんハイハイする】

4月～8月

園に既にあったマットと平均台を使って遊ぶ。平均台1台にマットを乗せて上り下りできるようにする。マットにフラフープをかけて半円にし、トンネルのようにハイハイで通ったり、揺らしてバランスを取る。マットを玩具棚などで挟みトンネルのようにする。

手作りジャングルジムを使ってつかまり立ちや段差をハイハイしたりして遊ぶ。

ソフロックを壁際に設置しつかまり立ちをする。

### 【凸凹の環境で歩いてみる】

9～10月

凸凹マットを常時設置。マジックマット、坂道マットを設置。

10月～

凸凹マットの位置や形を変更し設置。

### 【重たいものを押しながら力をいれて歩いてみる】

11月～

手押し車を適宜提供

### 【バランスボードにのって、バランスを取る】

12月～ 歩行が安定してきたので、さらに子どもたちにチャレンジ

## 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

### 使用した素材

- ・らくらくマジックマット
- ・平均台
- ・ソフロック (階段)
- ・手作りジャングルジム
- ・フラフープ
- ・凸凹グロックランド、ベビーファーストウォーカー、くるりんマットランド
- ・手作りバランスボード

### 環境設定

・段階を踏んで、室内で身体を動かせるように遊具を設定。常設する事で、子どもたちがいつでも遊べるようにした。

#### 4. 探究活動の実践

##### <活動の内容>

###### 【ハイハイできる環境を作り、たくさんハイハイする】

床に一つずつ並べてその上に立ったり、ハイハイで手をかけたりするところから始まった。凸凹ブロックを飛び石のように置くのは難しかったので、つなげてその上に乗ることを行った。ハイハイする環境を多様に設定した。いろいろな場所をハイハイすることで活動の時間が長くなり、手や足を踏ん張る姿が見られた。

###### 【凸凹の環境で歩いてみる】

10月に壁に添わせて凸凹ブロックを2～3つ積み重ねて山のようにし、その上に登った。始めてすぐは、凸凹マット同士の間隙に足を入れて身動きが取れなかったり、積み重なったマットの方がぐらぐらと揺れることにバランスを取るのが難しい様子であったが、どこに足を乗せればいいのかを考えている様子が見られたり、先に上がった友だちの様子を見て同じように登ろうと挑戦したりしているうちに登れるようになった。低月齢児もハイハイで上に登ろうとする様子があった。

###### 【重たいものを押しながら力をいれて歩いてみる】

子どもの人数が少ない時に提供した。歩き始めの児にとっては手押し車の勢いで前のめりになり、顔をぶつけそうになっていたが、歩行が安定してきた児は手押し車を押しながらも安定して歩行していた。

###### 【バランスボードにのって、バランスを取る】

バランスをとる必要があるので咄嗟に手が前に出ている。椅子のように座っている児も多くいた。スタッフが遊び方を見せるとサーフボードのように足を広げ、バランスを取りながら乗る児もいた。

##### <活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

凸凹マットなど新しいマットを出したころは歩行も始めたばかりということもあり、目が離せなかったが、常設して難易度を変更していくことで付き切りでなくても遊べるようになっていった。安定して遊べることにに対してスタッフが喜びを共感していけたので子ども達も自分に拍手をして喜んだり、他のマットに挑戦してみようという様子が見られたりした。ハイハイで移動している児もマットに立つことは難しいが他児の様子を見て、マットや階段に手をついて登る姿も見られた。スタッフは、「気を付けて」「よく見て」など不安な気持ちの声掛けから「もう少しで出来るよ」「ここまで手を伸ばしてごらん」と肯定的な応援する声掛けが出来ようになってきて、個々の発達（「立てた」「登れた」「歩けた」など）を他児と比べることなく喜んでいた。また、「ここまで出来るだろう」という発達の見立てができ、子ども達を信頼して見守ることが出来た。また、スタッフが遊び方を見せることで子どもも「それやってみたい」と楽しみながら身体を動かしていた。



## 5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

最初は使い方がわからず、スタッフが抱っこでマットに乗せたり、凸凹ブロックの隙間に落ちたりしていたが、自分で手足を動かして登れるようになったり、隙間があっても壁に手をつけて落ちないように身体を支えたり、自分で穴から這い出るようになっていった。

あまり行動的でなかった児も繰り返し行ううちに、自然と参加するようになった。（マットに寝転ぶところから上り下りを楽しむようになった。）

昨年の0歳児に比べて安定した歩行と意欲的な姿が見られた。

また体を動かすスペースが常設されているので日常的に動の遊びと静の遊びが選択できるので室内を不要に走り回って想定外の怪我をするなどインシデントが少なかったように感じる。

転倒による事故は少なからずあったが、その後再び転倒した時に手を前に出して顔から転ぶのを防ぐ姿が見られた。少しずつではあるが体の使い方が分かってきているのではないかと考えた。

また、マットを登った際に子ども同士で直接関わって遊ばなくても、笑いあったりと楽しんでいる様子があった。

スタッフ間でも都度様子を話し合い、使い方や難易度を変えて発展させていく事が出来た。今後は網ネット等様々な道具を使用し、くぐる、跨ぐ等自分で考えて身体の使い方を学習していけるようにしていきたい。